KWANSEI GAKUIN
SYMPHONY ORCHESTRA

豊岡市民会館

文化ホール

7月10日

7：00 P. M

関西学院交響楽団の演奏旅行に際して

関西学院大学長　小寺武四郎

本学の交響楽団は大正五年に結成され、近く60周年を迎えようとしております。また昭和初年からは、戦争中の一時期を除き、毎年演奏旅行を続けてまいりました。今年は中国方面の各地を訪れることになりました。

学生の交響楽団でありますので不十分な点も多いと思いますが、やはり生の演奏であることを楽しんでいただきたいと思います。そして、もし来会された方々の中で一人でも自分もやってみようというような気持になられたら本当に嬉しいと思います。とくに高校生の諸君の中から、関西学院に来学され、この交響楽団のあとつぎがでてくれば、といった空想もえがいております。

各地の演奏会が盛況であることを祈りますとともに、この演奏旅行の為にお世話になったすべての方々に心から御礼を申し上げます。

ご挨拶

関西学院同窓会但馬支部　支部長　西村四郎

今回の関西学院大学交響楽団の来但には後援の諸氏を初め皆様方の多大のご援助いただきあつくお礼申し上げます。

芸術は、より美しいものを求める人類の努力の所産であり、いつの時代にも、どこの地でも、この音楽芸術がどれ程人々の心を洗い、力を奮い起こさせたことかを思うとき、この但馬に私達の交響楽団の諸君を迎えることの意義もまた大きいものがあると考えます。但馬はとかく文化の中心地とへだたり、生(なま)の音楽に接する機会の少ない地域とはいえ、地味乍ら音楽人口は増えつつあり、現代の物質文化の流れの中で精神的な安らぎを求める熱意は他の地域にも劣らず強いものがあります。それ故、学生諸君の芸術意欲も充分に受けとめていただけることと信じます。楽団員の諸君の日頃の努力の成果に加えて今夕の全身込めた演奏にひとときの魂をおあずけ下さり、一条の清流を但馬の緑の山谷と静閑なたたずまいにみちびいて本当の心の安らぎを皆様にお届けすることがかねてより私達の念願でありました。

楽団員諸君もまた皆様からのご声援を賜ればそれを明日への活動の支えにして一層の研鑽を積まれますよう祈っております。

ご挨拶

関西学院交響楽団顧問
関西学院大学社会学部教授　丹羽春喜

今宵、関西学院交響楽団の日頃の練習の成果を、皆様に聴いていただくことができるはこびとなりましたことは、私にとって何よりの喜びであります。御承知のごとく、学生によるオーケストラ運動には、種々のきびしい制約がつきまといます。学業のかたわら、四年間を懸命に練習に励んで過ごし、ようやく音らしい音のでるようになったばかりのところで、「卒業」という形で多くのプレイヤー達が楽団を去ってゆかねばならず、そして未経験な新人をその代わりに迎え入れねばならないという宿命は、学生オーケストラ特有のものです。それにもかかわらず、この厚い壁に敢えて挑戦して、多くの若人たちが学生オーケストラの活動に尽瘁することは、学生たちの全人的な人間形成に役立つばかりでなく、我国の音楽文化の興隆に大きく寄与しうるものであると、私は堅く信じております。

多年の苦心の末、当楽団はようやく「演奏団体」らしい風格をそなえるようになってきたところではありますが、もとより、未熟な点は数多く残っております。皆様より忌憚ない御叱正、御激励を賜わりたく存じます。

この演奏会の開催につきまして、各方面よりお寄せいただきました絶大なる御厚意に対しましては、全く感激の一語に尽きます。衷心より御礼申し上げます。今後とも暖かい御支援をお願い申し上げます。

PROGRAM

Ⅰ The elopement from the harem , Overture ……………………W. A. Mozart

Ⅱ In the steps of Central Asia , A tone poem ……………… A. P. BORODIN

Ⅲ Finlandia , A tone poem ………………………………………J.J. SIBELIUS

——————Intermission ——————

Ⅳ Symphony No.9 in Eminor Op. 95 "from the New World " …A. DVOŘÁK

Ⅰ Adagio e Allegro molto

Ⅱ Largo

Ⅲ Scherzo : Molto vivace

Ⅳ Allegro con fuoco

焼きたての
フランスパン・デニッシュ

ブール進々堂

（株）豊岡進々堂直営店
豊田商店街
中央店
公設市場店

寝具寝装品・進物用品は

丸岡ふとん店

チェーン店

店舗 豊岡市駅通 TEL ② 2750
卸部 豊岡市問屋町 TEL ② 5297

―演奏曲目について―

歌劇「後宮よりの逃走」序曲
K 384
モーツァルト

この曲は、歌劇「後宮よりの逃走」の序曲として作曲されたものであって内容は次のとおりである。

大きくみればこの曲は3部形式である。しかし、前後のプレストがソナタ形式の提示部・再現部と同じ形をとっている為、展開部の代わりにアンダンテを設けた「ソナタ形式」とみる。提示部では、全体を通じて、トルコ音楽の特長である長短両調の目まぐるしい交替やエコーが用いられている。中間部ではトルコ音楽が沈黙し、フリュートを加えた木管楽器と弦楽器のみによっている。
再現部では、結尾部が拡大され、全体のしめくくりの役割を果たしている。

「中央アジアの草原にて」
ボロディン

ロシア国民学派の一人であるボロディンが書いた管弦楽曲は、三曲のシンフォニーと一曲のスケルツォとこの曲だけである。この曲は必ずしも彼の代表作といえないけれども、素朴な中に一幅の風景画を展開してみせる手法は、標題の示すステップ地帯の情景をよくとらえていると思われる。

彼自身の説明によると、「荒漠たる中央アジアのステップの静けさの中から耳慣れないのどかなロシアの歌が響いてくる。遙かかなたに馬やラクダの足踏みの音にまじって、東方の歌の独特な調べが聞こえてくる。ロシアの兵士たちに護衛され、果てしない荒野を通る彼らは、長い旅を不安もなく続ける。やがて一行は遠ざかって行き、ロシアの歌と東方の歌は結び合わさり、一つのハーモニーをつくる。そのこだまは次第次第にステップの中に消えていく。」となっており、曲もその言葉が示すように最初ピアニシモで始まり、単調なステップの感じを示し、クラリネットによって「のどかなロシアの歌」がうたわれる。そして、弦楽器のピッチカードにより隊商の近づいた事を示し、次々と楽器が加わって何となく様々な響きを作り出すうちに、イングリッシュホルンによってトルキスタン風の「東方の調べ」が奏され、曲は隊商の真近に迫った事を示す。そして、ついに行進曲になり、堂々たる隊商の音と蹄の音が一緒になって響き、この曲のクライマックスを作り上げる。それからは、隊商の去っていってしまう如く、曲もどんどん静かになってゆき、最後に遠い地平線に見えなくなるのと同時にこの曲も終るのである。

交響詩「フィンランディア」
シベリウス

ヤン・シベリウスは、フィンランドの国民的作曲家として、その独特な作風をもって世界に知られている。彼の作品は単に彼個人の創造物というより、フィンランド民族の叫びといった方が適切である。彼の音楽を理解するには、まずフィンランドの自然と民族について知る必要がある。

森と湖の国といえばいかにも自然美に恵まれた立派な国土のように聞こえるだろうが、事実はそんな生やさしい土地ではなく、不毛の原野に等しい様な部分が多く、勿論産物は豊かでなく、世界有数の貧乏国である。経済的な苦しみだけでなく、この国は昔からロシアとスウェーデンの両国から圧制され、政治的にも苦しみ通してきたのである。弱い民族なら大抵は骨抜きになってしまうだろうが、フィンランド人はどんなに圧制されても苦しみに耐え、頑張り通してきた。シベリウスの作品は、フィンランド民族の苦しみの声であり、いさましい叫びであり、祈りであり、そして又、彼自身にとっては美しい祖国の自然に対する讃歌でもある。

各種ベニヤ板造作材と新建材
佐藤木材店
668 兵庫県豊岡市大手町8番5号
電話〈豊岡－07962〉3－0310㈹

この交響詩「フィンランディア」は流浪の人が祖国に帰った時の印象を現わした音楽であるといわれている。

曲の印象も、初めてこの曲を聞いた人は北欧の民謡をその中に感じる。しかし、この曲の中の素材は、すべて彼自身の創作であり、そこに北欧の民謡を感じるのは、彼の肉体の中に内在していた祖国愛がそうさせたのであろう。曲は、圧制に苦しめられているフィンランド人の不安を表わすような無気味なバスと金管のファンファーレによって始まり、祖国愛を高揚させるような行進曲、美しい民謡的な旋律と進み、最後は、フィンランド人の勝利を表わす雄壮なファンファーレで終わる。

交響曲第九番ホ短調作品95
「新世界より」
ドボルザーク

アントニン・ドボルザーク（1841～1904）はいわゆる国民学派に属する作曲家で、その代表的な作品にはある一貫した民族的特性の個性的な表現がある。これは彼が現在のチェコスロバキア、当時は一般にボヘミヤと呼ばれていた中部ヨーロッパの国の田舎町ネラホツェベスの旅籠屋兼肉屋の子として生まれ、農民生活の環境の中に育ち、日夕、チェコ民族の歌舞音曲に親しむと同時に、父の家業柄で家に出入する旅音楽家の演奏に心をひかれ、ヴァイオリンを習い覚えたのが病つきとなり、遂に音楽家として立つ決心を固めた。

彼はジャネット・サーバー夫人の懇請により、ニューヨーク国民音楽院の院長をつとめたが、その間に、アメリカが彼に与えた友情と好意に対して、この交響曲を作曲し、そして彼自身、この交響曲に、「新世界より」という名称を与えた。四楽章より成るオーソドックスの連曲形式を採り、各楽章は、それぞれ序章をもって開始される。

第一楽章　　序奏　アダージョはホ短調4/8拍子

楽章本部はアレグロでソナタ形式。序奏はこれと有機的に結合し、全曲を一貫する精神的なものを用意する重要な任務を与えられている。

第二楽章　　有名なラルゴ　変ニ長調4/4拍子　ロンド形式

主要主題はイングリッシュ・ホルンによって提示される甘美極まりない施律である。進んでエピソードの中にはいるとチェロの奏するオルガン・ポイントの上に新しい主題が嬰ハ短調で現われるが、ドボルザーク自身の言うところによると、このエピソードはアメリカ大草原の朝早く、動物達の目ざめを暗示するものである。

各楽器群の間に受け渡しされるトリルの巧妙な用法は夜か、又は夜明けの会話のように適切である。

第三楽章　　スケルツォ・モルト・ヴィヴァーチェ　ホ短調3/4拍子

これは生気潑剌とした音楽で、インディアンが歌いながら元気よく踊っている姿を連想させ、同時にボヘミアの素朴な農民の歓喜にあふれた歌舞をも想起させる。トリオが2つあり、一つはホ長調、もう一つはハ長調で、どちらも明るい、開けっぱなしな生の歓喜の表情をもつ。

第四楽章　　終曲　アレグロ・コン・フォーコ　ホ短調4/4拍子　ソナタ形式

9小節の序奏の次に全管弦楽がフォルティッシモで奏する和音に対し、ホルンとトランペットが第一主題を題示して始まり、進んで3連音符のジーグ風な旋律が現われる。

第2主題は弦のトレモロを背景として、クラリネットによって提示される。それから既に演奏された各楽章の特徴をなしている主題が次々に姿を現わし、楽想的な豊かな模様を織りながら展開され、コーダの中で力強い頂点を築いて終結する。

個性を貴女に
フクとキモノ
たちのや
豊岡市駅通り商店街 TEL ③ 1529（代）
イーゴフク

関学ミニガイド

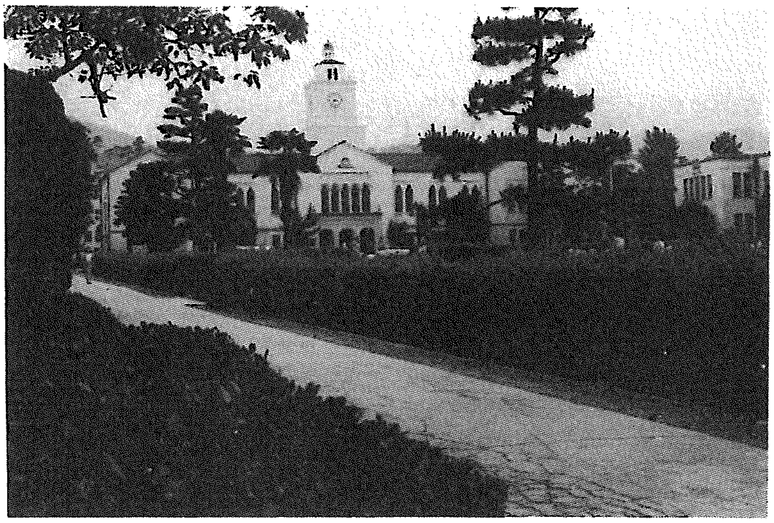
校歌「空の翼」

作詩　北原白秋
作曲　山田耕筰

1．風に思う空の翼
　輝く自由Mastery for Service
　清明ここに道あり我が丘
　関西、関西、関西、関西学院
　ポプラは羽ばたく、いざ響け我等
　風、光、力、若きは力ぞ
　いざ、いざ、いざ、上ヶ原ふるへ
　いざ、いざ、いざ、いざ、上ヶ原ふるへ

2．眉にかざす聖き甲
　萠えたつ緑 Mastery for Service
　躍々更に朗らよ我が自治
　関西、関西、関西、関西学院　（以下折返し）

3．旗は勇む武庫の平野
　遙けし理想 Mastery for Service
　新月ここに冴えたり我が士気
　関西、関西、関西、関西学院　（以下折返し）

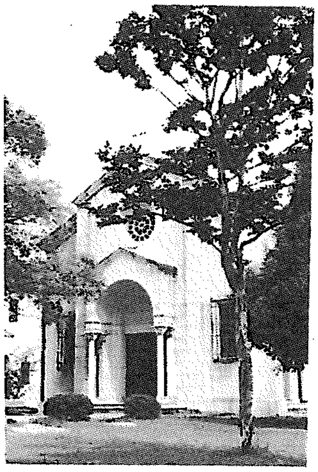


〈図書館時計台〉

関西学院大学は、昭和９年に専門学校としての文学部と高等商業学部を母体として開設されたが、関西学院そのものは、明治22年に、米国メソジスト教会W．R．ランバス監督によって創設されている。学院設立当時は普通学部と神学部を数えるだけであったが、現在80数年の伝統をもつ関西学院は、中学部・高等部と７学部と大学院を付置する大学からなり、学生数は、１万５千人を数える。（大学は１万２千人）

本学は、大阪市と神戸市の中間に位置する西宮市の山手、即ち上ヶ原の高台にある、六甲連山を望む緑の多い大学構内は、スパニッシュ・ミッション・スタイルの校舎が立ち並び、「新月クラブ」後方の池には白鳥がたわむれ、その景観は全国の大学でも一、二を争うほどの美しさを誇っている。なお、本学一帯は、全国で第二の文教地区に指定されている。

本学の特色は、もちろん本学の標語Mastery for Serviceにみられるようにキリスト教主義に基づく教育だが、他にいくつかの他大学にみられない点がある。以下、二、三それを「関西学院大学　コンパクト・ガイド」より引用しよう。



〈ランバス記念礼拝堂〉

●充実した総合コース

学問研究が深められていくにつれて専門化はますます進み、それだけ研究は細分化への道をたどりやすい。しかし、他方では学問の進歩は、閉鎖的で狭いカラに閉じこもりがちな専門領域のワクをとりはずし、たとえば境界領域の重視が強調されるにいたっている。ここに、関連する多くの領域にまたがって学問を多面的かつ総合的にとらえることが要請される理由がある。

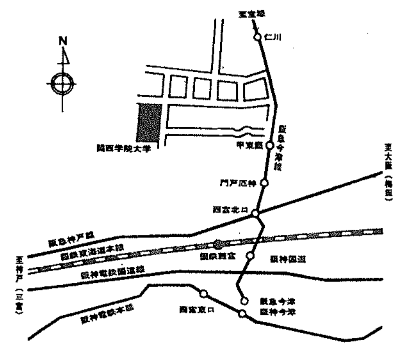
そのような要請をふまえて、本学が他大学にさきがけて「総合コース」の開設に踏み切ったのは、昭和45年度であった。以来、受講生に対するアンケートなどを通じて追跡調査を行い、学生諸君の反応を検討しつつ、講義内容に改善を加えるなどして今日にいたっている。

● 1、2年生にもゼミナール

これまでの大学が1、2年生、とりわけ入学してまもない1年生の諸君を何より困惑させ、かつ漠然とした不満をもたせてきたのは、まずは一般教育の魅力の乏しさや、一般教育と専門教育との断絶であり、さらには大教室でのスピーカーを介してなされるマスプロ授業であったといえよう。とりわけ教員が壇上から一方通行のように知識を伝えるマスプロ授業は、学生諸君から〝自ら主体的に学ぶ姿勢〟を奪い去るものとして強い批判を浴びてきた。

本学では他大学にさきがけて昭和45年度から1、2年生を対象にゼミナール（演習）の開設に踏み切った。

このゼミナールのもち方は学部により幾分の違いがある。1、2年を通じ学問を広い視野のなかでとらえようとする「人文演習」に力を入れる学部もあれば、1年生の段階で専門科目に関連の深い社会科学の領域に迫る「社会演習」を用意し、2年生で「人文演習」にはいる学部もある。しかし各学部に共通しているのは、学生諸君の主体性を尊重し、少人数のゼミナールをさらに幾つかの小グループに分け、研究発表や討論を活発に展開、それにベテラン教員が懇切な指導、助言を与える、といった相互啓発の方式がとられていることである。学問との真の出合いは、ここから始まるといえよう。



道 順

■阪急電鉄の大阪「梅田」または神戸「三宮」より同今津線「仁川」または「甲東園」まで約30分
「仁川」または「甲東園」より徒歩で約10分
「甲東園」より「関西学院前」ゆきのバスで約3分

■国鉄東海道本線西宮駅北出口より「甲東園」ゆきのバスで「関西学院前」まで約25分

●異色のオープン・セミナー

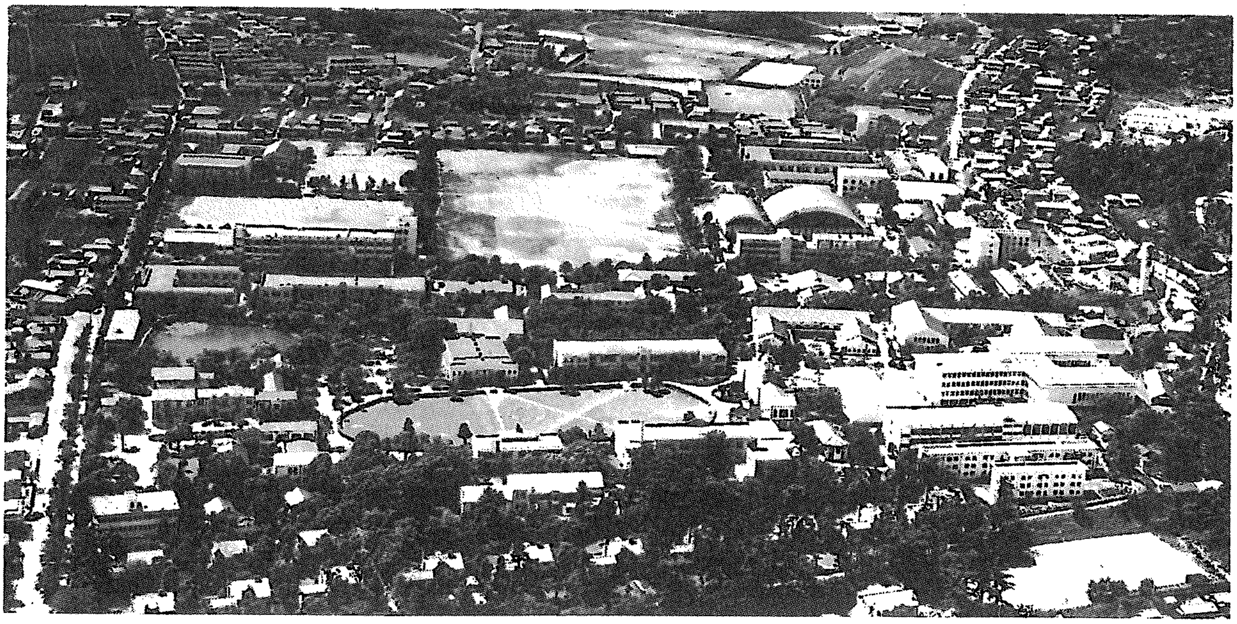
毎週の土曜日は、本学の場合、正規の授業はない。この日は、他大学では全く見受けられない、〝大学〟のパターンを完全につき崩した「オープン・セミナー」が開講されているのである。「オープン・セミナー」とは何か。

それは①土曜日に、①大学という閉鎖的な壁をとり払い、①本学教員に限らず、テーマによっては他大学の教員や社会で活躍するエキスパートを講師にし、①教室を、ときには美術館や工場など学外に移し、①多様化する学生諸君の知的探求心にこたえるようなテーマを設定し、ゆたかな思索に資するための講義を展開しようとするものである。だから、今までに開講されたテーマをふりかえっても、いずれも通常の大学の講義のもつイメージをつき破ったものばかりである。

●学生の声吸上げるC.O.D.

本学には、これまた他大学では例をみないC.O.D.（Campus Organization Development ―キャンパス創意開発機構）なる機関が存在する。学生諸君のなかにはカリキュラムや施設、制度や大学の運営方針などに不満を抱いたり、改善を求めたいとするものがいるに違いない。そのような彼らのさまざまな〝大学への問いかけ〟を謙虚に受けとめ、この声に委員が肉づけを施して、執行部なり関係部局に伝えるのが、このC.O.D.なのである。

しかも、ただの伝えっぱなしではなく、学生の要望が妥当なときは、早急に改善措置をとるよう当局側に強く要請するし、大学もまた機敏に対応し、実施に移している。



――関オケ昨年度の総括――

〔新学年〕（4月）

関オケの一年は新入部員獲得大作戦の展開から始まる。銀座通りに出店を張り、チラシやら立看やら。「他部に負けぬ」と血走った目で徒党を組み、話しかけるのは専らカワイ子チャンばかり、果てはポン引きまで出現。「ネエ、チョット寄ってらっして」「ウチは美人しか入れないことに……」その結果？は皆さんごらんのとおり。男はすべて先輩諸兄の白眼の中をズウズウしく居残ったものばかり。

（5月）

連休の特別練習をはさみ、練習も軌道にのるはずが……コンパ、コンパの連続。悪名高きチェロコンをはじめに、金管コン、クラコン、二枚舌コン、……コン。新入生歓迎遠足の頃が頂点。ある男など、今日は○○コン、明日は××コンと、多忙なる毎夜。家になど長らく帰ったことがないとのこと。その疲れからの練習中の青白顔は小物。夜の疲れを練習中の睡眠で取るのが大物といえる。チェロの指板にヨダレを流し、弓は床をかけめぐる。

〔仁川コンパ〕（6月）

かくてベー8、シュー8の定演も無事すみ、演奏旅行を目ざし蒸し暑い中の練習が始まる。その息抜きが仁川コンパ。30名近い野郎が暗くなり始めるとともに仁川の河原にどこからともなく集まり、火をたき、飲めや唄えの大騒ぎ。あたりの人気味悪がり近よらず、カエルまでが気持ちの悪さに「ゲロゲロ」。折りから蛍狩り来ていた家族に大声をあげるのからかうのした当人。数人の泥酔者をつれて下宿に帰ると、当家の奥方の「今晩仁川でゴロツキに会って……」うんぬん…の言にシドロモドロ。

〔演奏旅行〕（7月）

かくして、和歌山・奈良・愛知への演奏旅行が始まる。（我々の未熟なる演奏を暑いなか熱心に聴いて下さる人々の拍手で助けられるものの）猛暑の中の楽器はこびと演奏にグロッキーであるはずの夜、昼の演奏会とは別の艶騒会が始まる。今年もいくつかのカップルがサクラかリンゴかは知らぬが花とさき、それにあぶれたるもの、某君のように、女子キャビンに実然の御出現とあいなる。時は7月の全忠寺の夜、女子の寝息も軽やかにひびき、ふとんをはだけたる太モモも、あたかも八百屋の店頭をしのばせるかのように悩ましきとき、ふとふすまが音もなくカタカタと開かれた。腹をふまれたさる女子の悲鳴で目をさましたるさる女性。窓から逃げ出る男の背におびえながらも意を決して窓から外をのぞこうとしたその時、今、舞台、右上に居るさる野郎が大胆というか、不敵というか、またまた侵入を企て顔をつきだしたのです。〝キャー！〟本人は翌朝何くわぬ顔をし、男子部員の追及にも〝ネボケテイテシラヌ〟の一言。

〔前期試験〕（9・10月）

日頃は担当教授の顔も知らぬ我が関オケマンも、この時ばかりは目の色を変え、講義ノートや古テキストを求めて右往左往。つら一いつら一い練習からもこの間は解放され、指揮者が「演奏中もこのぐらいの」とうらやむチームワークで協力しあう。

〔秋の定演〕（12月）

我々は一生この1971年12月11日の夜の感動を忘れないだろう。武藤氏の顔はエロイカの一楽章から涙で美しく輝き、二楽章は悲しみにホールが鳴咽をこらえ、スケルツォは我々と我々の友人武藤氏の幸せを楽しく賛え、ホルンは空を舞う天使のハミングのようであった。四楽章にはいりフェルマータのとき我々全員の目は涙でかすみ、俊ちゃんの棒も涙でくしゃくしゃの顔も涙でかすんで見えなかった。そしてプレスト………

〔追い出しコンパ〕（1月）

恒例の四年生追い出しの儀、追い出される四年生、コンパ代タダと聞いて、ノコノコ出かけて来たが、後輩達に在部中の罪をすべて告発されシドロモドロ、あげくのはてに、帰りぎわ、会場の出口でとりかこまれ、出てくるところをもみくちゃにされ、なぐられるわ、蹴飛ばされるわ、九死に一生をえてにげ出した。編者註－それでも先輩達は喜びと悲しみで泣いてくれました。（あの気はなし）某一年生（当時）などは、どさくさにまぎれて、あこがれの4年女性に×××したなどと大騒ぎ、まずはメデタシメデタシ。

楽団員名簿

顧問　丹羽春喜　　常任指揮者　畑　道也

学生指揮者　里井和之　衣川　光　　コンサート・マスター　松木孝雄

Violins

○井上路子（社四）
井上節子（社四）
中根貴美子（文四）
○松木孝雄（経三）
有本祐子（文三）
北風桂子（文三）
衣川　光（商三）
塚本純子（商三）
山本智子（文三）
河合初美（文三）
畠中千秋（文三）
伊藤まや（社二）
奥田尚文（法二）
北村嘉朗（経二）
高橋三知子（文一）
東　香（社一）

Violas

○深尾　泰（法四）
横構育子（文四）
川村由美子（文三）
寺敷幸江（文三）
渡辺　誠（商三）
大岡宏子（社二）
太田千鶴（社二）
喜多洋三（経一）
山田真理子（文一）

Violoncellos

平井義郎（理四）
○広瀬　正（経三）
小谷修三（法三）
吉田　隆（法三）
佐原正哉（社二）
柴　洋子（神二）
柴崎正恭（経一）

Double-Basses

○豊田康次（法四）
内藤　純（法三）
西川正幸（社三）
藤本次郎（文一）
楊　鴻泰（商一）

Flutes &Piccolo

○樋口純子（文四）
里井和之（商四）
徳野佐規子（文二）
金子和子（文一）
村上慶二（法一）

Oboes &English-Horn

○中森良夫（商四）
中井英之（経三）
大西邦雄（経一）

Clarinetes

○十川能行（経四）
阪田吉文（文三）
大島利郎（法三）
斉藤正和（法二）
長橋　隆（理一）
宇都宮茂文（法一）

French-Horns

○泉　直樹（社三）
入貝　収（商三）
水谷正気（法二）
岡野守孝（経一）
殿原義弘（法一）

Faggotts

○榎本　茂（法四）
田中　敏（社二）
三好　克（法一）

Trumpets

○蜷川利文（商四）
武藤浩一（経二）
加藤恵啓（法一）

Percussions

増田和郎（社四）
藤本浩和（経二）

役員名簿

部長	中森良夫	人事	入貝　収
渉内マネージャー	中井英之	楽器	西川正幸
渉外マネージャー	泉　直樹	庶務	北風桂子
演奏旅行マネージャー	阪田吉文	楽譜	広瀬　正
経理	塚本純子		水谷正気

宝石、眼鏡、時計

三輪時計店

豊岡市駅通り（1番街）TEL②－2431

編集後記

やっとプログラムができました。あまり立派なものではありませんが、演奏会に添える一輪の花にでもなればうれしく思います。

学長をはじめとして原稿を書いて下さった諸氏、広告を提供して下さった方々、その他色々お世話になった方々に対して心よりお礼申し上げます。

どうかこのコンサートが、皆様のよいひとときでありますように。